

繁華街の若者の HIV/STI 感染リスク行動に関する行動疫学研究

研究分担者：松高 由佳（比治山大学現代文化学部 准教授）
研究協力者：草生 祐輔（ヴァレンティノジャパン）
合田 友美（宝塚大学看護学部 准教授）
研究代表者：日高 庸晴（宝塚大学看護学部 教授）

研究要旨

本研究では繁華街の若者男女を対象に、HIV/STI に関する知識・性行動・検査行動に関する横断調査を昨年度と同地点である大阪、および新たに札幌を調査場所に加え、実施した（研究1）。さらに、1～2年目の調査を基に開発した HIV/STI 予防啓発介入プログラムを大阪市内のクラブ店舗にて実施し、効果評価を行った（研究2）。

研究1では、大阪市内（2店舗）および札幌市内（1店舗）のナイトクラブに入店した18歳以上の男女を対象にタブレット端末を用いたオンライン行動疫学調査を実施した（2018年9月～2018年11月に10回、22時～深夜2時まで実施）。1,595件の回答があり、有効回答数は1,516件であった（有効回答率95.0%、大阪787件、札幌729件）。男性910名（60.1%）、女性606名（39.9%）、年齢は平均22.2歳（SD=3.8）で80.5%が20代、15.4%が10代、男性の93.5%、女性の88.4%が異性愛であった。得られた主な知見は以下のとおりである。

- 1) 知識：女性の83.8%、男性の75.6%が「HIV検査では膣／ペニスの診察がある」と誤解、全体の半数が「エイズにかかるとすぐに死ぬ」と誤解、76.7%が「迅速検査」の存在自体知らなかった。6項目中5項目で、札幌より大阪における知識の普及率が低かった。また、年齢層が若いほど知識が低かった。
- 2) 性行動：過去6か月間にセックス経験ありの割合は73.0%（男性73.0%、女性73.1%）、うち約6割が複数のセックスパートナーを有していた。外国籍の相手とのセックス経験ありは札幌で3.9%（男性2.6%、女性6.3%）、大阪で8.8%（男性9.8%、女性7.6%）と、大阪が札幌の2倍以上であった一方、札幌は女性が比較的高かった。過去6か月間のコンドーム使用状況（膣性交時）は、常時使用率札幌45.6%（男性52.1%、女性33.1%）、大阪45.8%（男性55.1%、女性32.8%）であり、いずれの地域も女性の常時用率が男性に比べ低かった。
- 3) 受検行動：生涯のHIV検査受検率は札幌7.8%（男性7.7%、女性8.0%）、大阪9.3%（男性9.2%、女性9.4%）であった。また、若年層ほど受検率は低いことが明らかになった。

以上より、初年度同様クラブ利用の若者の多くが HIV/STI の正しい知識を有していないことや、HIV/STI 感染リスク行動の実態が明らかとなり、年代では特に10代への介入が重要である。

研究2では、HIV/STI や検査の知識と適切な予防行動（コンドーム保持）促進に役立つ啓発を目的とした介入プログラムを実施し、効果評価を行った。2年連続で横断調査を実施した大阪市内のナイトクラブ1店舗を介入地点とし、入店した20歳以上の男女を対象にタブレット端末でオリジナルの介入コンテンツ（動画）を視聴させ、無記名自記式の前後比較試験を個別に行った（2019年2月に5回、22時～深夜1時30分まで実施）。294名が参加し、277名の有効回答を得た（有効回答率94.2%、男性142件、女性135件）。平均年齢は23.4歳（SD=3.3）で93.1%が20代であった。男性の93.7%、女性の88.1%が異性愛だった。

男性5項目、女性5項目の前後比較試験による効果評価を実施し、全ての項目（クイズ）で正答率が介入後（動画視聴後）有意に上昇、介入の効果が確認された（ $p < .001$ ）。具体的には、わが国における

梅毒の流行状況や HIV 感染=死ではないこと、HIV 検査では性器を見せる必要はないこと等、これまでの本研究のデータから圧倒的知識の不足が明らかとなった点において、男女双方に顕著な改善がみられたことを確認した。

このように、研究 2 では有効な介入を実施することができたといえよう。一方、クラブというロケーションにおける動画を用いた個別介入手法に関する限界点も示唆されたことから、今後はそれらを克服し、さらに多くの性的に活発な若者に浸透するコミュニティベースの予防啓発介入の検討、実施が必要である。

A. 研究目的

近年の国民一般における性感染症 (STI) 罹患の増加および HIV/AIDS への社会的関心の低下を鑑み、本研究初年次では繁華街の性的に活発な若者男女を主たる対象に、HIV/STI に関する知識・意識・性的リスク行動・検査行動の実態を明らかにする横断調査を実施した。その結果、HIV/STI に関する基本的な知識が圧倒的に不足していることが明らかとなり、彼らが HIV 検査受検や相談、早期治療につながる上で障壁となると考えられた。また、多くの若者が過去 6 ヶ月間に複数のセックスパートナーを有しておりセックス人数が多いほどコンドーム常用率が低いなど、感染リスク行動の実態が明らかとなった。

これを受けて本年度は 2 つの研究を行った。まず、【研究 1】として上記実態の継続性を検討するため横断調査を同地域 (大阪市) で再度実施するとともに、調査地域として札幌市を新たに加え、対象年齢も 20 歳以上から 18 歳以上と拡大し調査を実施した。これにより、若者男女への HIV/STI 予防啓発に資する基礎的データを拡充させることを目的とした。

また、【研究 2】として、HIV/STI や検査の知識と予防行動促進を目的とした HIV/STI 予防啓発介入プログラムを開発、実施し、その効果評価を行った。

B. 研究方法

【研究 1】

1. 調査対象者および手続き

大阪市内 (2 店舗) および札幌市内 (1 店舗) のナイトクラブに入店した 18 歳以上の男女を対象に行動疫学調査を実施した。調査時期は 2018 年 9 月～2018 年 11 月に計 10 回で、22 時～深夜 2 時まで実施した。調査員がクラブの入口付近で入場客をリクルート、研究班の iPad

で無記名自記式質問票サイトにアクセスし、約 3 分で回答する手順とした。iPad (8 台) が全て使用中の場合は対象者のスマートフォンで QR コードから同サイトにアクセスし回答させた。回答終了者には謝品としてクラブのドリンクチケット (700 円相当) 1 枚を手渡した。

外国人客および泥酔していると思われる客については本調査票への回答は困難であるためリクルートの対象から除外した。

2. 質問票の構成

回答回数、属性項目 (年齢、性別、恋愛対象となる性別、最終学歴、職業)、クラブ利用目的、HIV/STI や検査に関する知識、HIV 検査受検経験 (生涯)、献血経験、過去 6 か月間の「セックス有無、セックスした相手の性別・人数・種別・国籍、挿入行為の種類」、過去 6 か月間のセックス時のコンドーム使用状況等、STI 既往歴 (生涯)、薬物使用経験 (生涯) で構成した。

3. 倫理的配慮

質問票サイトは Secure Socket Layer (SSL) によって保護され、回答者が回答データを暗号化してサーバーに送信することで情報漏洩を防止した。対象者リクルートの際にはポスター、口頭での説明に加え、質問票サイト上の説明にて研究目的や質問項目、データの取り扱い、プライバシー保護等について十分に説明し、同意を得た場合にのみ回答画面に進む手続きとした。回答途中でも回答を取りやめることができる旨を表示し、調査終了画面には苦情・問い合わせ先を明示した。本研究の実施にあたり、比治山大学研究倫理審査委員会の承認を得た。

【研究 2】

1. 介入対象者および手続き

昨年度および今年度と 2 年連続で横断調査を

実施した大阪市内のナイトクラブ1店舗を介入地点とした。同店舗のエントランス内にて入店してきた20歳以上の男女を調査員がリクルート、インフォームドコンセントに同意したものにオリジナルの介入コンテンツ（動画）を視聴させ、その介入による前後比較試験を個別に行った（2019年2月に5回、22時～深夜1時30分まで実施）。前後比較試験項目への回答は無記名自記式で、回答結果をオンラインで研究用のGoogle formsに蓄積した。介入コンテンツの視聴および前後比較試験には研究班のiPad10台を使用し、「ステップ1：フェイス項目とクイズ（事前評定項目）」→「ステップ2：答え合わせ（介入動画視聴）」→「ステップ3：おさらいクイズ（事後評定項目）」の順に進めた。介入内容（動画および事前事後評定項目）については、本研究の1～2年目の横断調査結果および男性9名のヒアリング調査結果を基に構成した。各ステップについての詳細は以下のとおり。

ステップ1：フェイス項目（年齢、性別等）と事前評定項目「Love & Sex クイズ」に回答を求めた。クイズでは介入ターゲットであるHIV/STIに関する知識、検査や予防行動に関するクイズに「○（そう思う）」「×（そう思わない）」「？（わからない）」の3件法で回答を求めた。クイズには、男性用項目と女性用項目の2種類があり、フェイス項目で回答した性別に応じて分岐させた。ステップ1の項目に全て回答し「次へ」ボタンをタップするとステップ2に進むための指示（調査員を呼ぶ）が提示され、対象者から呼ばれた調査員が専用のキーを入力しなければ次のステップ（動画視聴）に進めない設定とした。

ステップ2：オリジナルの介入コンテンツ（動画）を視聴させ、この中でクイズの正答と関連する啓発情報を提示した。男性用動画、女性用動画の2種類を用意した。先のステップで男性用クイズに回答した場合は男性用動画、女性用クイズに回答した場合は女性用動画を提示する仕組みとした。なお、クラブ内は常に音楽がかかっていることから、動画の音声を確実に聞き取れるよう、調査員の指示により対象者にヘッドホン（あらかじめ音量を最大設定にしたもの）を着用させる措置を取った。また、システム上動画を早送りできない設定が不可能であったた

め、動画を早送りせず最後まで集中して見るよう口頭および画面上の記載で十分に教示した。対象者が動画を視聴している間は調査員が近くに立って様子を観察した。この間、早送りをしようとしたり、友人同士で会話しようとするなど視聴態度に問題があると調査員が判断した場合は、その場で声をかけ動画に集中するよう教示した。

動画が終了するとヘッドホンを外し、次のステップに進むため調査員に再度声をかけるようiPadの画面上で対象者に教示した。これを受けて対象者から呼ばれた調査員がヘッドホンを受け取り、次のステップ（事後評定）へ進むための専用キーを入力することで、画面が変遷する手続きとした。これにより、動画を視聴することなく事後評定に進むことのないようにした。

ステップ3：事後評定。「おさらいクイズ」として事前評定項目と同じ項目に回答を求めた。回答終了後に表示される謝辞画面を調査員に見せた回答者には、調査員が謝品としてそのクラブで使用できるドリンクチケット（700円相当）を手渡し終了とした。

2. 介入動画の構成

男性用、女性用いずれの動画も約2分で、YouTuberの男女が二人で掛け合いをしながら字幕や写真とともにクイズの正解を伝えながら啓発内容を伝える形式とした。主な内容はHIV/STIに関する知識と予防行動に関する啓発であった。具体的には、以下のような点を伝えた。

- ・梅毒が若者の間で流行していること、主な症状
- ・HIVは治療が進歩していてもはや死の病気ではないこと
- ・HIVや梅毒は検査で早期発見することが重要で、検査は血液検査のみですぐに結果がわかるものもあること、検査では性器を見せる必要はないこと
- ・HIV/STI予防にはコンドームが重要だが、持ち歩く際には摩擦で劣化しないようケースに入れるなど工夫すると良いこと
- ・（女性向けに）コンドームを相手が使用したがない場合の対応、セイファースックスするためのセリフ、行動など

・(男性向けに)最近のコンドームの進歩や種類など

3. フェイス項目および事前事後評定項目

フェイス項目は、年齢、性別、恋愛対象の性別であった。事前・事後評定項目については以下のとおりで、回答は、「○(そう思う)」「×(そう思わない)」「?(わからない)」の3件法であった。

一部男女で異なる項目があるため、以下男女別に記載した。

① 男性用項目

- Q1. 2018年は、戦後初めて梅毒の年間患者数が6000人を突破した(正解○(そう思う))
- Q2. エイズにかかるとすぐ死ぬと思う(男女共通)(正解×(そう思わない))
- Q3. HIV(エイズ)の検査では、ペニスの診察がある(正解×(そう思わない))
- Q4. コンドームを忘れず持ち歩くには、財布に入れておくのが最も良い(男女共通)(正解×(そう思わない))
- Q5. 選び方次第で、コンドームを使ったセックスはもっと心地よくできる(正解○(そう思う))

② 女性用項目

- Q1. この5年間で、20代女性の梅毒感染者数が急増した(正解○(そう思う))
- Q2. エイズにかかるとすぐ死ぬと思う(男女共通)(正解×(そう思わない))
- Q3. HIV(エイズ)の検査では、内診(産婦人科での膣の診察)の診察がある(正解×(そう思わない))
- Q4. コンドームを忘れず持ち歩くには、財布に入れておくのが最も良い(男女共通)(正解×(そう思わない))

このほか、女性を対象として以下の1項目も事前・事後の評定項目とした。「セックスの時、もし相手がコンドームを使いたがらなかつたら、使うよう相手に働きかける(またはセックスを断る)方法やセリフを思いつきますか?」。回答は、「1 かなり具体的に思いつく」~「5 全然思いつかない」の5件法で求めた。

4. 倫理的配慮

前後比較試験および介入コンテンツ(動画)

のサイトは Secure Socket Layer(SSR)によって保護されており、回答データの送信の際は内容を暗号化し、情報漏洩を防止した。参加者リクルートの際にはポスター、口頭での説明に加え、サイト上の説明にて研究目的や質問項目、データの取り扱い、プライバシー保護、苦情・問い合わせ先等について十分に説明し、同意を得た場合にのみステップ1(フェイス項目と事前評定項目)画面に進む手続きとした。また、回答途中でも回答を取りやめることができる旨を表示した。本研究の実施にあたり、比治山大学研究倫理審査委員会の承認を得た。

C. 研究結果

【研究1】

1. 回答者

1,595件の回答があり、2回目以上の回答、回答傾向から不正回答が予見されるケース、性別で「その他」を選択したケースを分析から除外した。その結果、有効回答数は1,516件であった(有効回答率95.0%、大阪787件、札幌729件)。男性910名(60.1%)、女性606名(39.9%)、年齢は平均22.2歳(SD=3.8)で80.5%が20代、15.4%が10代であった(range 18~53)(表1)。男性の93.5%、女性の88.4%が恋愛対象として異性のみを選択した(表2)。その他、クラブ利用目的、職業、最終学歴については表2に示した。なお、以下クロス集計の有意水準は5%以下とした。

2. HIV/STIに関する知識、検査の知識

正答割合が最も低かったのは「HIV(エイズ)の検査には、内診(婦人科や産婦人科での膣の診察)がある/ペニスの診察がある」で正答率女性16.2%、男性24.4%であった(男女別項目)。つまりHIV検査に性器の診察があるかどうかについて約8割前後の男女が誤解していた。ついで正答率が低かったのは、「その日のうちに結果がわかるHIV(エイズ)検査がある」で、正答率23.2%(男性26.5%、女性18.3%)であった。そのほかにも「HIV(エイズ)にかかると、すぐ死ぬと思う」は全体の49.3%が誤解するなど、HIV/STIに関する知識、検査の知識は昨年度同様、全体的に低いことが明らかになった。6項目中5項目で、札幌より大阪における正答率が

低い傾向にあった（表3）。

年齢層別にみると、「STI罹患でHIVに感染しやすくなる」以外の項目全てで、年齢層による正答率の割合に有意差または有意傾向がみられ、若年層ほど正答率が低い傾向がみられた。特に、迅速検査の存在およびHIV検査で性器の診察がないことを理解している割合は10代で20%に満たず非常に低かった（表8）。

3. HIV検査受検行動

生涯のHIV検査受検率は札幌7.8%（男性7.7%、女性8.0%）、大阪9.3%（男性9.2%、女性9.4%）で、大阪のほうが若干高い割合であった。受検経験ありの回答者に受検場所を尋ねたところ、保健所等は札幌36.8%（男性47.2%、女性19.0%）、大阪52.1%（男性63.4%、女性37.5%）、病院・診療所等は札幌47.4%（男性30.6%、女性76.2%）、大阪31.5%（男性17.1%、女性50.0%）、郵送検査は札幌7.0%（男性11.1%、女性0%）、大阪5.5%（男性7.3%、女性3.1%）であった。いずれの地方も郵送検査以外は男女間に有意差または有意傾向がみられ、女性は保健所等より病院・診療所等で、男性は病院・診療所より保健所等で受検した割合が高いという傾向の違いが確認された（表4）。

一方、年齢層別にみると受検経験割合は年齢層による有意差がみられ、若年層（10代）ほど低い値であった。受検場所については10代において保健所・保健センターの利用経験率が低い傾向であった（表9）。

また、今回新たに生涯の献血経験の有無についても訪ねたところ、献血経験ありと回答した割合は札幌36.8%（男性40.9%、女性29.5%）、大阪28.8%（男性34.2%、女性21.9%）で、いずれの地域も男性のほうが有意に献血経験ありの割合が有意に高かった（表4）。年齢層別では、年代が若いほど経験率は低い値となった（表9）。

4. 性行動

過去6か月間にセックス（膣性交、アナルセックス、オーラルセックス、相互マスターベーション）経験ありの割合は札幌74.2%（男性75.1%、女性72.7%）、大阪71.9%（男性70.8%、女性73.4%）で、そのうち約6割が複数のセックスパートナーありと回答した。過去6か月間

のセックス人数と相手種別等の詳細は表5に示した。外国籍の相手とのセックス経験ありは札幌で3.9%（男性2.6%、女性6.3%）、大阪で8.8%

（男性9.8%、女性7.6%）と、大阪が札幌の2倍以上であったが札幌では女性が比較的高い傾向にあった。過去6か月間のセックスの相手種別（複数回答）では、「恋人など特定の相手」が札幌59.7%（男性58.7%、女性61.5%）、大阪53.2%（男性50.2%、女性57.0%）と、いずれの地方においても最も割合が高く、次いで「友達・セフレ」が札幌48.6%（男性49.6%、女性46.9%）、大阪43.8%（男性45.7%、女性41.4%）、「街やクラブでナンパされた相手と」札幌12.9%（男性12.3%、女性14.1%）、大阪12.2%（男性11.4%、女性13.1%）の順に割合が高かった。金銭授受を介したセックスについては「お金を払った相手と」が札幌4.6%（男性6.6%、女性1.0%）、大阪3.4%（男性5.4%、女性0.8%）で、いずれの地域でも女性より男性の割合が有意に高かった。「お金をくれた相手と」と回答したのは札幌1.5%（男性1.1%、女性2.1%）、大阪1.8%（男性1.9%、女性1.6%）であった。

年齢層別にみると、30代が最もセックス経験率が高く82.2%、次いで20代74.4%、40代68.8%、10代64.5%であった（表10）。そのほか、年齢層別にみた過去6か月間のセックス人数、相手性別、種別、国籍等については表10に示したが、年齢層による有意な偏りはみられず、特に若い層に特徴的といえる結果はなかった。

過去6か月間にセックスありと回答した人に、経験した性交の種類（複数回答）を尋ねたところ、膣性交が札幌93.2%（男性95.1%、女性89.6%）、大阪83.7%（男性87.6%、女性78.9%）で、いずれの地域でも男性のほうが女性より経験割合が有意に高かった。アナルセックス（挿入側）は札幌男性5.4%、大阪男性5.4%、アナルセックス（被挿入側）は、札幌2.4%（男性0%、女性6.8%）、大阪4.8%（男性0.6%、女性10.0%）であった。過去6か月間に膣性交があったと回答した人にコンドーム使用状況（膣性交時）を尋ねたところ、常時使用率は札幌45.6%（男性52.1%、女性33.1%）、大阪45.8%（男性55.1%、女性32.8%）であり、いずれの地域も女性の常時使用率が男性に比べ有意に低かった（表5）。アナルセックス時のコンドーム使用

状況については、挿入側（男性）の状況をみると、札幌より大阪の常用率が顕著に低かった。年齢層別にみたコンドーム使用状況（膣性交）では若年層ほど若干常用率が高くなる傾向がみられ、もっとも常用率が高い10代では50.4%であった（表10）。

5. 既往歴（生涯・複数回答）

最も割合が高かったのはクラミジアで、札幌10.4%（男性8.2%、女性14.4%）、大阪7.8%（男性5.2%、女性11.1%）で、男性より女性が有意に高い割合となった。次いで梅毒が札幌4.4%（男性4.7%、女性3.8%）、大阪3.9%（男性5.2%、女性2.3%）、淋菌感染症が札幌3.4%（男性2.4%、女性5.3%）、大阪2.2%（男性2.0%、女性2.3%）であった（表6）。上記3疾患はいずれも札幌が大阪より若干高い値となった。しかしながら、大阪のみで実施した昨年度結果（クラミジア12.2%、梅毒8.4%、淋菌6.6%）を下回る結果となった。年齢層別にみると（表11）、クラミジアなど、おおむね高い年齢層ほど既往有の割合が高くなる傾向がみられたが、生涯既往を聞いていることも大きい要因であろう。

6. アルコール関連・薬物使用経験（生涯・複数回答）

最も経験率の高かったアルコールでの「酔いつぶれ（お酒で記憶をなくした）」は、札幌25.9%（男性24.3%、女性28.8%）、大阪21.5%（男性19.1%、女性24.6%）であった。次に経験率が高かったのは札幌では大麻で2.9%（男性3.9%、女性1.1%）、大阪では睡眠薬・睡眠導入剤で2.5%（男性1.6%、女性3.8%）と続いた（表7）。違法、脱法ドラッグのいずれかを生涯に経験した割合は札幌5.6%（男性7.5%、女性2.3%）、大阪3.4%（男性4.7%、女性1.8%）で、札幌の男性が最も高い割合を示した。

年齢層別にみると、30代で大麻の使用経験率が他の層と比較して顕著に高いこと（11.1%）、10代（未成年）にも関わらず「酔いつぶれ（お酒で記憶をなくした）」と回答した者が19.2%もいるという問題が明らかとなった（表12）。

【研究2】

1. 参加者（表13）

294名が参加した。2回目以上の回答者、回答傾向から不正回答が予見されるケースを除き、277名の有効回答を得た（有効回答率94.2%、男性142件、女性135件）。平均年齢は23.4歳（SD=3.3）で93.1%が20代であった。男性の93.7%、女性の88.1%が異性愛だった。

2. 介入動画視聴による変化（表14）

前後比較試験に用いた項目についてマクニマーの検定（女性1項目については対応のあるt検定）を実施した。男女とも全ての項目において正答率が介入後（動画視聴後）有意に上昇した（表14、 $p<.001$ ）。具体的には、わが国における梅毒の流行状況やHIV感染＝死ではないこと、HIV検査では性器を見せる必要はないこと等、これまでの本研究のデータから圧倒的知識の不足が明らかとなった点において、男女双方に顕著な改善がみられた。

なお、介入内容（財布に入れてコンドームを持ち歩くのは不適切）に連動させる形で、コンドームとカラフルでシンプルなコンドームケースを用意し自由に持ち帰るよう呼びかけたところ、多くの参加者がコンドームケースに興味を示し、コンドームとともに持ち帰った。

D. 考察

横断調査（研究1）では、昨年度と同様にクラブの若者にHIV/STIの基本的知識が浸透していないことが確認された。特に、10代の若い層においてエイズ＝死というイメージや、HIV検査に性器の診察があるといった誤解をしている割合が高いこと、迅速検査を認知している割合が低いといった問題が明らかになった。10代ではHIV検査受検率が他の年齢層より低く、また保健所での検査経験も低かったことから、上記の知識のなさや誤解から主体的な受検行動や相談に至らない可能性も考えられる。このことから、特に若年層を重要なターゲットとして今後の介入を検討していく必要がある。なお、受検率については全体として昨年度の数値を下回った（11.6%→8.6%）。未成年（18歳以上）も新たに調査対象に含めたことが背景の1つである可能性もあるが、いずれにせよ受検推奨のための介入は引き続き重要な課題である。

性行動については昨年度同様、回答者の多く

が過去6か月間に複数のセックスパートナーを有していること、コンドーム常用率が男性より女性において顕著に低いことを確認した。女性に対する予防啓発介入は重要であるが、コンドーム使用では男性側の意識や行動が多くの場合不可欠であることから、セーフターセックスに関する男性側の規範や行動をいかに促進させるかが特に重要な課題である。

また、アルコール・薬物使用経験については30代で大麻の使用経験率が高かったこと、10代（未成年）にも関わらず「酔いつぶれ（お酒で記憶をなくした）」が約2割という結果が明らかとなった。こうした実態は性的リスクとも関連すると考えられるため、今後も注視していくとともに、HIV/STI 予防啓発介入においても注目すべきポイントの1つと捉える必要がある。

HIV/ STI 予防啓発介入の効果評価（研究2）では、わが国における梅毒の流行状況やHIV感染＝死ではないこと、HIV 検査では性器を見せる必要はないこと等、これまでの本研究のデータから圧倒的知識の不足が明らかとなった点において介入（動画視聴）によって男女ともに知識を底上げすることに成功した。また、その後の効果までは検討できていないが、動画に関連付ける形で若者にコンドームケースの実物を手にとってもらうことによって、介入内容がより印象に残り、確実な予防行動を促進する一助となったのではないだろうか。

一方で、方法的な限界も考えられた。介入動画は若者に親和性の高いものになるようユーザーが楽しい雰囲気、字幕や写真も多用してテンポよく介入内容を伝える形式とした。このことで、クラブユーザーの若者にとっては例えば啓発資料を読むといった形式よりも取り組みやすく、一定の成果につながったと考える。しかし、ヘッドホン着用、調査員の声掛けなどの手続きを設定したものの、ダンスミュージックが常にかかっておりアルコールが入った状態で訪れるケースが多いナイトクラブというロケーションでは、動画に集中することが困難な様子の参加者も散見された。また、個別介入方式では介入数を伸ばすのにかなり時間がかかることも明らかとなり、横断調査に比して少ないサンプル数にとどまった。

そこで、こうした方法上の限界点を克服し、

個人レベルではなく集団レベルでセーフターセックスへの意識や行動を促進していくために、クラブコミュニティを巻き込んだ介入を新たに開発していく必要がある。

E. 結論

本研究では、わが国においてはあまり報告のないナイトクラブ利用の若者男女における性行動の実態、HIV/STI や検査に関する知識の実態等について、昨年度より調査地点や年齢層（特に若年層）を拡充したデータを獲得した。これにより、繁華街の若者の性的リスクをより詳細に検討し、HIV/STI 予防啓発に資する情報を得た。今後も同地点での横断調査によって若者の性行動や知識の動向を継続的に注視していくことが必要である。

また、これまでの横断調査結果を基に繁華街の若者を対象としたHIV/STI 予防啓発介入と効果評価を行い、参加者のHIV/STI 予防や検査に関する知識が底上げされたことを確認した。クラブ利用の若者男女を対象としたこれらの試みはわが国では例がなく、性的に活発な彼らにとってクリティカルなポイントに照準を絞ったHIV/STI 予防啓発介入を実施することができた。一方で、今後はさらに多くの若者の心に刺さる、より効果的な手法により予防啓発介入を行う必要がある。

F. 発表論文等

（英文）

1. Matsutaka Y., Koyano J., Hidaka Y. : Perceptions of reducing HIV-preventive behaviors among men who have sex with men living with HIV in Japan. *Health. Health*, 2018, 10, 1719-1733.

（和文）

1. 松高由佳：セクシュアリティ・ジェンダーと世代継承性，世代継承性研究の展望（岡本祐子・上手由香・高野泰代編著），ナカニシヤ出版，第8章，2018，407-425.
2. 学会発表
（国内）
 1. 合田友美・松高由佳・萬田和志・中村圭奈子・日高庸晴：HIV/STI 郵送検査を受検する若者男女の性感染症に対する認識と予防行動の特

徴：第 37 回日本思春期学会総会・学術集会
シンポジウム(2)「性教育の未来を語る」, 2018,
東京.

2. 大塚泰正・松高由佳・津野香奈美・藤 桂・
村木真紀・葛西真記子：職場におけるセクシ
ュアルマイノリティ支援, 日本心理学会第
82 回大会公募シンポジウム, 2018 年 9 月 27
日, 仙台国際センター
3. 松高由佳：繁華街の若者における HIV 感染リ
スク行動とコンドーム不使用の理由, 第 32
回日本エイズ学会学術集会・総会, 2018 年 12
月 3 日, 大阪国際会議場

G. 引用文献

なし